
幻想郷征服録

桜三里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷征服録

【Nコード】

N2307BA

【作者名】

桜三里

【あらすじ】

博麗大結界に今日も包まれ、平和な日々を過ごす幻想郷。

しかし弱った妖怪、幻想物を回収する役目を持つ博麗大結界が引き寄せ幻想郷へと至らせた相手は、最悪の災厄だった。

黄金の英雄王ギルガメッシュ。

外の世界と結界により隔離されたその地は、世界全てを所有するギルガメッシュにとつて、所有物ではない。ならば、よかろう。征服王よ、時にはこの我^{オレ}も征服と戯れようではないか。

F a t e / s t a y n i g h t の英雄王ギルガメツシュが幻想入りという誰得な小説です。少しでも楽しんでいただければ。

プロローグ（前書き）

東方モノを書くのは初めてです。感想などお待ちしております

ブローグ

その男は王であり あらゆる者も あらゆる鎖も

Der Mann ist King; wie f?r jede Kette
e Person wie f?r jede Kette

あらゆる総てを持っても繋ぎ止めることが出来ない

Ich kann es nicht damit binden,
auch wenn ich es damit mache,
jedes alles

彼は縛鎖を千切り 枷を壊し 哄笑する世界で唯一の王

Ein K?nig nur in der Welt, von
der er rei?t, und bricht gyve
und Lachen

この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない

Ich habe keine Macht, ihn von
der Welt all jeden Sachen in S
chach zu halten

ゆえ 神は問われた 貴様は何者か

Dann fragte ihn Jesus: Was ist
Ihr Name?

愚問なり 無知蒙昧 知らぬならば答えよう

E s i s t e i n e d u m m e F r a g e . I c h a
n t w o r t e .

我が名は——ギルガメッシュ

M e i n N a m e i s t | g i r g a m e s h

プロローグ（後書き）

元ネタはD i e s i r eのラインハルト・ハイドリヒの詠唱、
レギオン』です。 ㊦

Side ルーミア

人食いの少女は、眼下に広がる霧の湖を見下ろしながら、いつも通り気促に宵闇の中を舞っていた。

この湖は、昼間になると深い霧で覆われる。そして夜になれば霧が晴れ、また朝になれば霧が発生する、という奇妙な性質を持っている。それが何故なのかは知らないし、興味もない。彼女にとってはただ夜の散策で通り過ぎるだけの場所であり、別段興味の対象にはならなかった。

ルーミアは、この時間が好きだった。

闇を朋友とする彼女にとって、太陽の光は大敵である。一日の活動時間を終えて西へと沈んだ太陽と共に、少女の気安い時間が訪れるのだ。わざわざ自分の周囲に闇を発生させずとも、当然のように闇に覆われた空。星々の瞬きこそ存在するものの、その程度の薄い光はルーミアにとって、闇と変わらない居心地である。

この時間は、彼女にとって何の憂いもなく、狩りができる時間だった。闇を恐れる人間へと夜闇に乗じて襲いかかり、その身を喰らいつくすのが彼女にとって、最高の愉悦となる時間だった。そんな風に襲った人間の数が、もうどれほどになったかは分からない。数えたこともないし、数えようとさえ思わない。例えるならば、今まで何度食事を摂ってきたのかを問われたところで、即答できる人間などいないだろう。ルーミアにとって、人間を食った回数というのは、それに似ていた。

だが同時に、ルーミアは知っている。この時間に、彼女の獲物が出歩きはしないことを。

人間は闇を恐れ、妖怪を恐れる。昼が人間の時間ならば、夜は妖怪の時間だ。それを知っている人間は、夜になれば人間の里で眠りに入っている。妖怪であるルーミアは、人間の里に入ることはできないのだ。領域を侵した時に、動く輩のことを考えれば、至極当然な考えですらある。

例えば――人里の守護者と不死鳥の少女。

例えば――博麗の巫女と黒白の魔法使い。

例えば――妖怪の賢者と九尾の狐。

人里へと侵入した時点で、これだけの大物を敵に回すこととなる。それはルーミアのみならず、妖怪にとっては忌避すべき対象だ。間違はなく、殺されるのは自分であると分かるのだから。

だからこそ、ルーミアにとっての獲物は、危険を承知で里の外を出歩く人里の人間か、もしくは、そんな常識さえ知らない外来人か、その程度に限られる。

とはいえ、人里の人間などほとんど出歩きはしないし、もし存在したとしても、大抵は彼女以外の妖怪にとって食われる。この辺りの妖怪は、どいつもこいつも食欲旺盛だ。そんな中でルーミアが先に発見することなど、それこそ稀、というものだ。

だからこそ、ルーミアは別段、狩りの成果を期待して飛んでいたわ

けではない。どうせ獲物は見つからないのだから、夜の散歩程度の気安さで飛んでいただけだ。

誰か友達でも見つければ、適当に雑談にでも興じよう。この時間ならば、蛍の妖怪が夜雀あたりが暇をしているかもしれない。彼女らの根城は、確か竹林あたりだったかな、と適当に向かう場所を決めようとして。

それを。

見つけた。

霧の湖から紅魔館へ続く森。吸血鬼の住まう紅魔館の威光が、その森に住まう者は皆無と言っている。ルーミアと同じ、人食いの妖怪でさえ住まうことは稀だ。

理由はただ一つ。

吸血鬼の根城近くを人間が通ることなど、皆無であるからだ。

だがルーミアは、見つけてしまった。目を向けてしまった。霧の湖と紅魔館に挟まれた森の、ほぼ中央。

——闇。

闇を操る彼女にとって、ひどく身近な存在。人が忌み、妖が好むもの。

自然、ルーミアの向かう先はそちらへと矛先を変えていた。

まるで、この世全ての悪を内包したかのような、圧倒的な闇。

彼女は、闇を好んだ。

ルーミアの全速でもって、立ち上る闇へと向かう。強大な闇。それこそ、ルーミアの操る闇などお話にもならないほどの、絶対的な闇。それならば――。

喰らえ。

妖怪としての本能が、ルーミアにそう告げていた。

闇の中心へと降り立つ。木々に包まれた森の、小さく拓かれた場所。樹齡が幾らかなど見当もつかない大樹に囲まれた、小さな間隙。

そこにいたのは、男だった。

星の小さな瞬きにさえ煌めく、黄金色の髪。逆立ったそれと同じ色でありながら、それ以上に激しい輝きを持つ儼かな黄金の鎧を纏っている。少なくともこの幻想郷では、あまり見かけない格好。

鋭い眼差しが、ルーミアを見据えた。

「……消えよ」

重く響く、低い声音。その言葉に込められているのは、圧倒的な威圧感。

殺気すら込められた言葉に、ルーミアは息を呑む。

「我^{オレ}は些か機嫌が悪い。その命を散らせたくなくば、疾く消えよ」

これは——王だ。

決定的に存在の次元が違う、絶対的に存在している、王だ。

そう、本能で、理解した。

ごくり、と唾を飲み込む。畏怖すると同時に。恐怖すると同時に。それは甘美な果実を目の前にしたような感覚でもあった。

ただそこに存在しているだけで、漏れ出る圧倒的な闇。

だからこそ、ルーミアの言葉は、発せられた。

「あなたは、食べてもいい人間？」

いつだって、獲物を目の前にすれば告げた言葉。それに対する答えが何であれ、食うことには変わらないのだけれど。通過儀礼のようなものだ。

己が人食いの妖怪であると誇示し。

相手がこれより食われる運命を暗喩する。

いつだってルーミアにとつての獲物は、この言葉と共に恐怖した。あの博麗の巫女と黒白の魔法使いを除いて、誰もが死に恐怖した。

「……ほう」

だが目の前の男は、そう静かに微笑むだけだった。

「我^{オレ}に対してそのような物言いをするとは、人食いの化生は礼儀も知らぬようだな」

「れーぎ？ それって美味しいの？」

「だが、己が武に依ることではしか語る言葉を持たぬ者は、好まぬこともない」

くくく、と男が嗤う。ルーミアの頬を、一筋の汗が流れるのが分かった。

自分では、この男には絶対に勝てない。

本能がそう警鐘を鳴らす。逃げる。そう理性が警告する。この場から離れる。全ての感覚が、ルーミアを追い立てる。

だけれど、知ってしまったのだ。

この、強大すぎる闇を。

「貴様の武がどれほどかは知らぬが、我^{オレ}が少々遊んでやるとしよう」

男が言葉と共に、立ち上がる。ゆらり、と鈍重な動き。しかし、確実に眼差しはルーミアを見据えて。

次瞬。

ルーミアは我知らず、懷からスペルカードを取り出していた。

枚数の提示、カード宣言、スペルカードルールに施されたあらゆる規律を、この場では考えない。あらゆる全ての手段を用いて、あらゆる全ての卑しさを持つて、全力で挑まなければ絶対に勝てない。彼女はそう本能で理解した。

これは『弾幕ごっこ』などでは、決してない。

殺し合い、だ。

「夜符『ナイトバード』！」

スペルカードを叫ぶと共に、ルーミアの前方に弾幕が伸びる。翼のように左右へと弾幕を展開し、逃げ場を奪うスペル。煌めく紫と青の弾幕が展開されるも、目の前の男は特にどうということもなく、変わらず面倒臭そうに前髪へと手櫛を入れるだけだった。

「ふむ、さすがは童女といえ化生といったところか」

男はそう呟くと共に、右手の指を弾く。それと共に、確実に男を捉えていたはずの弾幕が。

「……え？」

捻じ曲がった。

まるで物理法則を無視しているかのように、直線で向かっていったはずの弾丸が、男へ当たることを避けるかのように、曲がってしまった。ナイトバードにそんな効果はないし、付加した記憶もない。それなのに。

「さて、どうやら後の世では『絶対不^{アスピス・ヘバイトス}落の砦』などと大仰な名を付けられているらしいが、我^{オレ}にとつては所有物の一つでしかない神代の盾よ。神代より伝わりし盾の前で、貴様の弾丸など塵芥にも等しいぞ、雑種」

男がその右手に携えている、小さな丸盾。まるで時代に合っていない、青銅でできたような盾。神にも等しいほどの——圧倒的な存在感を持った、大盾。

それが男の周囲に不可視の結界を張り、弾幕を全て、捻じ曲げたということ。

ルーミアは混乱した。そんな能力は、聞いたことがない。弾幕とは耐えるものでもなければ防ぐものでもなく、躲すものだ。弾くものでもなければ捻じ曲げるものでもなく、避けるものだ。

そんな常識など、一切が通じない。

「あ……あ……げ、月符『ムーンライトレイ』っ！」

ばら撒く小さな弾丸と、中央に走る光線。いくら不可視の結界といえ、威力だけならばムーンライトレイの方が高い。ルーミアはそう信じて、破壊力だけならばどのスペルにも勝る、それを放ったはずだった。

「ふむ、月光か。悪くはない。もつとも、偉大なる我^{オレ}にとっては月の光すら足りぬ。我^{オレ}を照らしたいと言うならば、太陽を持ってくるがいい」

だがそれでも、男はただ平然と、ただ超然と、そこに立っていた。

信じられない——その思いに、体が震える。

いつか戦った、博麗の巫女。いつか戦った、黒白の魔法使い。どちらも強かったし、ルーミアは勝つことができなかった。

だがルーミアは思う。確かに博麗の巫女も黒白の魔法使いも強い。だけれど。

この男ほどに、圧倒的な力があつただろうか。

「余興は仕舞いか？　では我^{オレ}も、財を幾つか見せてやろう」

同じように、右手で、指を鳴らして。

「『^{ゲートオブバビロン}王の財宝』」

男の背に、数多の神剣、聖剣、神槍、聖槍、古今東西あらゆる神話に登場する、一振りだけで世界の命運を変えてしまえるほどの幻想を持った、武器が。

一斉に、その矛先をルーミアに向けた。

Side 博麗靈夢

博麗神社の夜は早い。もっとも、それに対して確たる理由があるというわけではない。

単純に今代の博麗の巫女、博麗靈夢の寝る時間が早い、というだけだ。幻想郷というのは娯楽に乏しく、頼んでもいないのに勝手に持つてくる迷惑天狗の作った新聞くらいしか暇潰しの道具はない。そして靈夢は、八割方が主観で書かれた新聞を、貴重な油を使ってランプを灯してまで読む趣味はない。

つまり、暗くなれば眠る。明るくなれば起きる。それがこの博麗神社の主、博麗靈夢の生き方だった。

そして今日も同じく、いつも通りの時間に床につき、いつも通り眠りについた、はずだったのだが。

不意に、神社の縁側の扉が開く音がした。

物盗りにしては、自分の音を隠していない。つまり、見つかったところで問題のない相手だということだ。もっとも、靈夢ならばいくらか音を隠したところで、気配で察するのだから意味などないのだが。

布団に包まったままで目を開き、考える。

第一候補、黒白の魔法使い、霧雨魔理沙。

恐らくこの神社に訪れる人間で、最も頻度が高い相手だろう。厄介なトラブルメーカーであるも、どこか憎めない彼女は、何故かよくここに入り浸る。

だがそれも、時間を考えてのことだ。わざわざ霊夢が眠りについてまで、ここに入り浸るほど魔理沙は迷惑な輩ではない。もしも魔理沙だとするなら、何かの事情を抱えていると考えた方がいいだろう。

第二候補、小さな百鬼夜行、伊吹萃香。

魔理沙と同じく、この神社に入り浸る酔いどれ少女の鬼である。いつもふらりとどこかへ出かけていって、同じくふらりとまた戻ってきては酒を飲む、という生活だ。

考えられるとすれば、ふらりと神社へ戻ってきたはいいものの、夜であるため家主である霊夢のことを考え、縁側にて一人手酌で月見酒でも楽しんでいる、といったところか。悪酔いすれば、霊夢が起こされて付き合わされる可能性もある。もつとも、あの鬼が悪酔いしている姿など見たことはないのだが。

第三候補、神隠しの主犯、スキマ妖怪、八雲紫。

幻想郷でも最古参の妖怪で、幻想郷を覆う博麗大結界の維持を行う大妖怪。その实力は幻想郷全ての实力者の中でも五指に入り、特に『境界を操る程度の能力』という反則じみた能力がそれを示してい

る。

まあ霊夢にとつては、ただの胡散臭い妖怪に過ぎないのだが。幻想郷の危機に異変解決へと迅速に乗り出す以外は、式神に任せきりで寝てばかりのグータラ妖怪だ。もしも今訪れた相手が紫ならば、それこそ大問題が発生しているとみていいだろう。

さて、霊夢に思い浮かぶ候補は、それくらいのものだが。

願わくば、少々微睡んでいるため、寝所に入ってこない程度の用件であつてほしい。

そんな願いは、叶わなかったけれど。

「……霊夢、起きなさい」

意外な人物の来訪などは当然なく、それは第三候補、八雲紫の声だった。

思い切り溜息を吐きたかったが、堪える。魔理沙の持つてくる厄介事程度ならば、まだ良かった。悪酔いした萃香が無理やり酒に誘つてくる程度ならば、まだ良かった。

この時間に、八雲紫がここを訪れる。それは、すなわち。

幻想郷の、危機を示しているのだから。

「……何よ」

起き上がる。紫はいつも通りの名前と同じラベンダーのドレスを纏い、夜だというのに日傘を片手に枕元に立っていた。体は睡眠を欲していたが、それでも紫を無視するわけにはいかない。

幻想郷の危機とすら呼べる状況に、博麗の巫女である霊夢が動かないわけにはいかないのだから。

「あんたが神社に来るなんて、珍しいわね。賽銭箱は表にあるわよ。でも参拝は、できれば昼間にしてほしいんだけど」

「……火急の用件よ」

霊夢の軽口を受け流し、紫は重々しくそう口を開く。

その表情に浮かぶのは、痛々しいほどの絶望感。幻想郷でも圧倒的な力を持つこのスキマ妖怪の、このような姿を見たことはない。

つまりそれだけ——事態は切迫しているということだ。

「博麗大結界は、外の世界で弱った妖怪を幻想郷に保護する、という目的もある……なんて、あなたは言わなくても知っているわよね？」

「……当たり前でしょ。今更、私に博麗大結界の講釈をしに来たわけ？」

「靈夢……どうやら今回、博麗大結界はとんでもない輩を引きつけてしまったみたいなのよ」

とんでもない輩——その言葉に、思わず靈夢は息を呑む。

この幻想郷に存在する実力者は、それこそ強者に満ちている。例えば目の前のスキマ妖怪であったり、冥界の死を操る亡霊であったり、紅の館に住む吸血鬼の姉妹であったり、蓬莱の姫君とその従者であったり、竹林の炎を操る不死鳥であったり、山の上の神社を司る二柱の神であったり。

地底には核熱を操る鴉も一騎当千の鬼もいる。人里には半人半獣の歴史喰らいもいる。人里近くに最近越してきた寺には、毘沙門天の使いと自称する者までいるのだ。

それだけの実力者が並んでいる幻想郷において、八雲紫が言う『とんでもない輩』。

つまり——それ以上の実力を持つ、博麗大結界の危機となりえる存在、ということ。

「……そいつ、何者よ」

「外の世界で、全てを統べていた王。あらゆる財宝は彼の所有物で、あらゆる人間は彼の支配にあった。人は彼を、こう呼んだ」

八雲紫はそこで言葉を切り、苦々しく唇を噛みながら、ゆっくりと告げた。

「英雄王——ギルガメッシュ」

02（後書き）

この物語の主人公はギルガメッシュですが、ギルガメッシュ視点にはなりません。基本的には東方キャラの視点になります。

03（前書き）

説明回です。説明長すぎてダレるかも

Side 博麗靈夢

紫からそのように言われた靈夢にできたのは、精々小首を傾げるくらいのものだった。

「……ギルガメッシュ、って言われてもね。何それ、新種の亀？」

「今は冗談を言っている場合じゃないわ、靈夢」

軽口で流そうとしてみたが、変わらず紫の表情は硬い。靈夢にはただ、溜息をつくことしかできなかった。

時間も憚らずに人の寝室を訪ねてきて、しかも語り口が冗長である割に火急の用件だとか、冗談を言っているのはそっちじゃないのか、と対する言葉は幾つかあったけれど、呑みこむ。

「はぁ……大体、そんな危険な外来人が来たってんなら、あんたがどうにかすればいい話じゃない。わざわざ私の所に話を持ってこないでよ」

その代わりに口から出たのは、そんな言葉だった。

八雲紫という一種一代の妖怪は、それだけの力を持っている。

有無を言わず、そのギル亀とやらを自分のスキマに放りこんで、そのままの世界へと捨てればいいだけの話だ。紫にとっては、大した苦勞でもないだろう。

それなのに、わざわざ霊夢の所にまで話を持ってくるといふ行為が理解できない。

「私も……そう思っていたわ」

だが——それに答えたのは、紫の沈痛な面持ちだった。

「とんでもない奴が来た、そう思って、幻想郷の平和を第一に排除しようとした。私のスキマへと、永遠に封印するつもりだった」

そう言つて、紫は右手の扇子を開く。同時に、くぱあ、と空間が裂けるように、彼女の『スキマ』が現れた。

八雲紫の持つ通称、『スキマ妖怪』の語源である——あらゆる距離、時間、法則を無視する空間、スキマ。

「でも、できなかった」

最強とさえ、言っていない能力なのに。

「いえ、違うわね。正確には、ギルガメッシュへとスキマが到達することはなかった。私から何度干渉しても、一定距離へと近付いた時点で能力が掻き消されるのよ」

スキマが到達することなく、打ち消される。

つまり。

「……結界みたいなもんを張ってるわけ？」

「と、いうよりは常時開放型の能力と言った方がいいかしら。博麗大結界が、ギルガメッシュに対して何らかの能力を与えたものと思われるの」

「能力、ねえ」

幻想郷に暮らす者は、大なり小なり能力を持っている。霊夢の『主に空を飛ぶ程度の能力』、紫の『境界を操る程度の能力』をはじめとして、その種類は様々だ。中には紅魔館の吸血鬼のように、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』、『運命を操る程度の能力』などといった物騒なものまである。

まあ、人里に暮らす一般人なんかは『竈の火がいつでも点けられる程度の能力』、『明日の天気に分かる程度の能力』、『どこに居ても南が分かる程度の能力』などといった、戦いには一切使えない微妙

すぎる能力を持ち合わせている場合が多いのだが。

たまにやってくる外来人は、とんでもない能力を持っていることが多いと聞くが――。

「恐らく……いや、間違いないわね。ギルガメッシュの能力は、『王である程度の能力』よ」

「はあ？ 王である程度の能力？」

思わず霊夢は首を傾げる。『あらゆる干渉を打ち消す程度の能力』とかならばまだ分かるが、『王である程度の能力』というのは、あまりにも具体性がない。

しかし、紫の面持ちはふざけているような様子が欠片もない。心底本気で言っているのだろう。霊夢にはどうにも、その『王である程度の能力』の恐ろしさとやらが理解できないのだが。

「ええ……『王である程度の能力』。つまり、その存在そのものが『王』なのよ。王様というのは、基本的には一番偉いでしょう？」

「うん」

それは、霊夢も否定しない。幻想郷に王というものは存在しないため、その偉さとやらがいまいち理解できない部分はあるけれど。

霊夢にとっての王という存在の認識は、「まあ、偉い人なのよね」程度だ。

「一番偉い人物である王は、その行動を誰にも邪魔されない。つまりこれが能力の拡大解釈結果として、『王であるがゆえにあらゆる干渉を拒絶する』ということが起こっているのよ」

「……なるほど。だから紫のスキマが近づけないわけね」

「ええ。私のスキマは、それこそ『干渉』そのものだから」

「でもそれだと……弾幕も効かないことにならない？ あらゆる干渉を拒絶するんなら、攻撃こそまさに最大級の干渉じゃない」

もしも弾幕が効かないとなれば、それこそ最強だ。絶対に勝てない。霊夢はそう考えて、背筋が寒くなる。

「……いえ、恐らく、攻撃は効果があるわ」

「なんでよ？ あらゆる干渉を拒絶するんでしょ？」

「確かにその通りだけど、それはあくまでも能力の拡大解釈なのよ。例えて言うなら——紅魔館のメイド長は知っているわね？」

「咲夜？ あいつがどうかしたの？」

思いもよらない名前に、思わず霊夢は眉を寄せる。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。『時間を操る程度の能力』という反則的な能力を持ち、一流のナイフ投げの腕を持つ。それでいて吸血鬼姉妹に対するメイドとしての奉仕も完璧だとか。一家に一人欲しいメイド、と評判である。

「あの子は……年をとらないわ」

「は？ 何言ってるのよ、咲夜は人間よ？」

「『時間を操る程度の能力』を持つということは、決して『時間を止める』『時間を動かす』『加速させる』『減速させる』、くらいしかできないわけじゃないわ。『時間』とは人間で言うならば『加齢』、つまり年齢ね。『時間』を操ることができるということは、つまり『加齢』も操ることができる。これが能力の拡大解釈よ」

「……あんたは真面目に説明するつもりがあるの？」

さっぱりわからん、とでも言いたげに、肩をすくめる。

紫は呆れたように嘆息して、「つまりね」とまだ説明を続けるつもりらしい。いい加減説明ばかりで飽きてきた、と霊夢は口を尖らせる。

「ギルガメッシュの持つ『王である程度の能力』の拡大解釈として、『あらゆる干渉を拒絶する』という結果を生み出した。けれど、そ

れはあくまでも拡大解釈であって、能力から産まれた二次的な副産物みたいなもののよ。ギルガメッシュの本来の能力が『王である程度の能力』である以上、博霊大結界によって定められたスペルカードの攻撃は、『干渉』と認識されない。分かった？」

「……ウン、ワカッタ」

もう疲れたため、そう霊夢は紫に生返事を返す。紫はなんとなく訝しむ目で霊夢を見てきたが、特に何も言ってはこなかった。

「まあ、今回は別にいいわ。改めて明後日の昼間、博霊神社を使わせてもらっわよ」

「……なんでよ？」

唐突な話題の変換に、思わず霊夢はそう反応してしまう。

「なんでって、分かってるでしょう？ ギルガメッシュの存在は、幻想郷にあつてはならないもの。だけれど、私一人の力じゃ倒せそうにないし、幻想郷の実力者に渡りをつけて、全員でどうにかして倒そう、っていう作戦なんだけど」

「……あいつらが動いてくれるわけ？」

霊夢は、これまでの異変で色々関わった連中の顔を思い出す。

うん、どいつもこいつも我侭放題かつ自分勝手の自己中だ。とてもじゃないが、紫を中心とした統率的な行動なんて取れるわけがない。

「……そこは、私がどうにかするわ」

が、紫には勝算があるらしい。

霊夢にはとても思い浮かばなかったが、その代わりに嘆息を返す。

「まあ、分かったわ。それじゃ明後日の昼間、使いなさいよ。その代わり、お茶は出すけど出廻らしになるし、茶菓子なんて出さないわ。もし欲しいなら、自分で持ってきてきなさい」

「……何か買ってから来ることにするわ」

ふふっ、と紫が笑う。そしてそのまま、唐突に出てきた空中の裂け目に、吞まれていった。

03（後書き）

オリジナル宝具解説

『アスベス・ヘパイトス
絶対不落の砦』

ギリシャ神話に登場する鍛冶の神、ヘパイトスが作り上げた青銅の盾。

『イリアス』においてアキレウスが使用したため、『アキレウスの盾』という名前の方が有名。

真名開放をせずとも、常時一定範囲内に結界が形成される。ただしヘパイトスが作り上げ、アキレウスが使用する『以前』の原典であるがゆえに、本来の『アキレウスの盾』よりもその結界の力は弱い。本物の『アキレウスの盾』は盾自体にアキレウスの不死性が付与されているため、壊れることがない。

宝具解説していなかったので一応。

04（前書き）

若干グロ注意

タグにR - 15を追加しました

Side ルーミア

圧倒的すぎる力だった。

空中から唐突に現れた数多の聖剣、魔剣の類に、ただひと振りだけで歴史を変えてきたような武器の数々。その全てがルーミアを刺し、貫き、掠め、突き立てた。

ヒュー、ヒュー、とくぐもった声が、喉から漏れる。その体に四肢は既になく、出来の悪い人形のように転がっている。右腕は粉々に千切れ、左腕は皮一枚で辛うじて繋がっており、左右の足は爆ぜて消えた。それでも、ルーミアはまだ死んでいない。

本来ならば一撃で巨人すらも塵殺できるであろう宝具の射出をその身に浴びながらにして、それでもまだ、生きていた。

「ほう、まだ生きておるか雑種」

金色の男がルーミアに近づき、そう薄笑いを浮かべながら言う。

本来ならば、ルーミアは死んでいる。

四肢を失うまでもなく、最初に放たれた宝具の二、三本目で、ルー

ミアは既に死んでいただろう。

そんなルーミアが生きているのは、ひとえに博麗大結界、スペルカードルールのおかげだった。

枚数の提示といった細かい点については省略したものの、ルーミアは己のスペルカードのみで勝負を行った。そして博麗大結界は、スペルカードルールで戦う以上はそこに死者を出さない。だからこそ、ルーミアは生かされているだけだ。

「^{オレ}我の財をあれだけその身に受け、未だ生きているとはな。化生といえ、その生命力は評価に値する。褒めてつかわす」

どこまでも傲慢に、男はルーミアにそう告げる。

だけれどルーミアは、そんな男の言葉に、胸が張り裂けるような思いを得た。己が、この王に認められた——それだけで、死を待ち動きを悪くしようとしている心臓が弾んだ。

何故、とルーミアは思う。

現在半殺しにされ、そして遠くない未来殺されるであろう相手に、遙かな天空から見下されながらお褒めの言葉をいただく——そんな現状に、ひどく興奮している自分が理解できない。まるで、それが。

——嬉しい、みたいに。

「武辺の化生よ、名を聞こう。我に名乗ることを許す^{オレ}」

「……るー、みあ」

そんな男の言葉に、ルーミアは喉から声を絞り出して応える。決して男は、ルーミアに強要をしたわけではない。声を出すことすら全身が痛むような現状、名前など答える必要なんて一つもなかった。

だけれど、答えなければならぬ、そう思ってしまった。

「ルーミアか。覚えておくぞ、雑種」

どくん、とまた心臓が跳ねる。ルーミアはただ名前を呼ばれたただけだというのに、激しい昂りが心を染めていた。

もっと言葉を聞きたい。もっと近くにいてほしい。もっと名前を呼んでほしい。

そう考える反面、違う感情がそれを制止する。

言葉をいただけるなど勿体無い。あまりの気高さに近寄ることすらできない。名前を呼ばれるなどあまりに畏れ多い。

だつて、彼は。

その男は、王であるのだから――。

「さて、一体ここは何処だ。英霊の座に帰るものであると考えていたが、受肉をしている存在は英霊の座に戻らぬということか。全く、まさか最後にあのフェイカーが足掻いてくるとは……」

虚空を睨みつけながら、そう呟く男。

その言葉の内容など何一つ分らない。だけれど、ルーミアは思った。この王は、幻想郷の人間ではない。つまり、外来人だ。

ならば――。

「待……っ、て」

ルーミアに背を向けようとした男を、そうか細い声で制止する。

小さな声ではあったが届いたようで、男は足を止め、そのまま首だけでルーミアを振り返った。

「何用だ、雑種。我^{オレ}を呼び止めるとは、不敬であるぞ」

「……わた、しは、るー、みあ」

「貴様の名は先程聞いたはずだ。いつ我が同じ質問をした」

「あなた、の、家臣に、して、くだ、さい」

そこまで言い切って、ごほごほつ、と咳き込む。口の中を、金臭い血の味が占める。これが人間のものであるならば甘露なのだが、生憎自分の血に対して美味いと思えるほど、ルーミアは変わっていなかった。

男は、そんなルーミアの言葉に眉を寄せる。

「ふむ。そのような半死人の身で我が臣下にあることを望むか。しかし雑種よ、我は弱い家臣などいらぬ。貴様を拾ったところで、最早命は保つまい」

「死、にま、せん……」

相変わらず咳き込みながら、ルーミアはそう男に告げる。この男が手を貸してくれるならば、ルーミアは即座に回復する自信があった。だから、ルーミアは懇願する。

「わた、しが、死、ななかつた、ら、家臣、に……」

「ほう。しかし、その状態からどのように生き返るつもりだ？ 我^{オレ}の持つ治療薬をくれてやっても良いが、それでは賭けになるまい。良からう、家臣のおらぬ王というのも張子の虎よ。貴様が見事生きのびることができたならば、我が一の家臣としてやろう」

「な、ら……」

それを指さそうとして、手がないことに気付いて、思わず苦笑した。意識が朦朧としている。早く伝えなければ、手遅れになるかもしれない。既に四肢を失って、随分な時間が経っている。下手をすれば、このまま死んでしまう羽目にもなりかねない。

だから。

「わた、しの、リボ、ン、を、外……して」

それを、示した。

「リボン？ ふむ、その程度の用事にこの我^{オレ}を使おうとは、雑種とは思えぬほどに面の皮が厚い。しかし、貴様の腕を無くしたのもまだ我^{オレ}だ。此度は我^{オレ}の手を煩わせることを許す」

男が膝を下ろして、ルーミアの頭にある、リボンに触れようとする。それと同時に、ぱちっ、という静電気のような音。

「ふむ」と一言呟き、男が手を引っ込める。

「はず、せ、ない……？」

「巫山戯るな雑種。この我^{オレ}に出来ぬことはない。ふん、まさか封印——しかも、これほど強力な呪いの封をされているとは思わなかっただけだ。この程度、我が財をもつてすれば容易く解除できる」

そう男は言って、何もない空間から、歪な形をした短刀を出した。

全く戦闘には向いていなさそうな、何かの儀式に使われるような、紫色の短刀。男はそれを軽く手先で弄び、そして、ルーミアに向けて。

振り下ろした。

思わず、ルーミアは目を瞑る。その短刀の切っ先は、ルーミアに刺さることなく、ただそのリボンだけを切った。

どくん——どくん——ルーミアの体に、止めどなく力が溢れ出す。

あふれ出た妖気は闇となり、その四肢を形作る。肩までしかなかった髪は腰元まで伸び、そして全体的に幼かった体が、相応に成長し

てゆく。まるで早回しのように行われるその光景を、男はまるで余興の一つであるかのように、腕を組んで見ていた。

「……ふう」

体を再生し、全身を全盛期の姿に戻したのちに、ルーミアは軽く前髪をかき上げた。

服装は普段と変わらないものの、完全にその身に纏う雰囲気は、ルーミアのそれではなかった。むしろ、もっとおぞましい何かであるとさえ言っている。

「ふむ、なかなか良い余興であつたぞ」

「……こっちは、体の再生に必死だったんだけどさ。まあ、いいか。お陰様で封印が解けたよ、ありがとう」

「なに、我が臣下のことだ。臣下を氣遣うこともできずして、王は名乗れぬ」

男はそう言って、態度を変えない。大抵、封印される前のルーミアを見た人間は、悲鳴を上げてどこかへ逃げていつてしまうのだが。

だから、そんな男の態度は、ルーミアにとって好感の持てるものだった。

「では、改めて」

す、とルーミアは頭を下げて、片膝をつく。

それは、騎士が王に忠誠を誓う所作。

「我が名はルーミア。王、あなたに忠誠を誓います」

「ルーミア、貴様の忠誠を受け入れよう。我が名はギルガメッシュ。貴様の王となる者だ」

そうして幻想郷に、一組の主従が誕生した。

04（後書き）

カリスマA+の本領発揮のギル様です。

呪いの類のようなカリスマということで、『特に理由はないけど忠誠を誓う』みたいなことが頻繁に起こるのではないかと考えてルーミアを臣下に入れちゃいました。

EXルーミアについて。

作者の捏造です。だけどルーミアって実はすごく強いと思う。闇を操るわけだし。

それからEXルーミアがよく持っている剣ですが、あれについても勿論あります。勿論宝具です。もう少ししたら出ると思います。

「是非このキャラを臣下に加えてくれ！」ってゆーリクエストがありましたらどうぞー。よほど無理なキャラじゃない限りはリクエストにお答えします

Side ミステリア・ローレライ

ミステリア・ローレライは、時折竹林で屋台を営んでいる。八目鰻の蒲焼きと酒を提供し、ミステリア自身は人食いの妖怪であるものの、その屋台を営んでいる限りは人間を食べないと決めていた。その営業努力に本人の料理の腕もあってか、最近では妖怪のみならず人里の人間も飲みにくる程度には認知されている。

夜半。

最後の客が帰り、これ以上営業しても新しい客は来そうにないな――と暖簾を下ろそうとした、その時に。

妙な客が来た。

いや、ミステリアの屋台には、妙な客ばかり来るのだが。例えば食べるだけ食べて飲むだけ飲んだ拳句に颯爽と去ってゆく黒白の魔法使いとか。金払え。あと例えば食べるだけ食べて飲むだけ飲んだ拳句に何事もなかったかのように去ってゆく紅白の巫女とか。金払え。ちなみに二人揃って現在は入店禁止である。

そんなミステリアをして、『妙な客』と言わせるのは、勿論理由がある。

一人は、知り合いだ。知り合いのはずだ。

昨日まではつけていたはずの赤いリボンを何故か外し、幼い容姿が成長して妙齡の女性と言える姿になっている、宵闇の妖怪ルーミア。「そーなのかー」と笑顔で言ってくるのが特徴だったはずの彼女は、何故かそんな雰囲気など何一つ持たない、何かおぞましい妖怪にでも変化したかのように一変している。

そして、もつと妙なのはその連れだ。

黄金の鎧に身を包み、また同じく黄金の髪を逆立てた、男である。ミステリアも幻想郷で暮らして長いが、このような男は見たことがない。容姿もそうであるが、同じくその身を包んでいる、淀んだような闇そのものも。

「いらっしやいませー」

まあ、妙であろうと変であろうと注文して金さえ払ってくれるならば、ミステリアにとってはいいお客様である。ひとまず七輪に炭を追加して、うちわで扇ぐことにした。

「夜中にすまないね、ミステリア。もう閉める頃だろう？」

「うっん、いいよ。それよりご注文は？」

「ん。私は八目鰻の蒲焼きを二つに、冷酒を一つ。王、どうされま

すか？」

注文に、ミスティアは七輪の上へと串に刺した鰻を載せる。だが同時に、ルーミアの口調に違和感を覚えた。まるで子供を相手にしているかのように、どうにも幼いのがルーミアらしさだったのだが。

まるで身体的のみならず精神的にも成長しているかのように、本当に別人ではないかと思えるほどに、ルーミアらしくない。

そして何より、そのルーミアが、連れを『王』と呼んでいるのだ。

王という苗字なのか、と一瞬思うが、まさかそんなことはあるまい。疑問が頭を巡るが、特に気にしないことにしてミスティアは冷酒を注ぎ、ルーミアの前に出す。

「ふむ。では店主よ、この店で一番高いものはなんだ？」

「……はあ。うちは八目鰻の蒲焼き一本でやってますんで、八目鰻の蒲焼き以外は出ませんけど。酒ならこの前、人里の老舗の酒蔵から仕入れた一級品がありますが」

「ではそれを疾く出せ」

「はい。少々お待ちください」

偉そうな客である。ミスティアは別に、『お客様は神様です』という妙な宗教は持ち合わせていない。むしろ『お客様は金様です』と

いった方が正しいと考えている。まあ、とはいえこちらが店で向こうが客である以上、そんな対応も仕方ないのかもしれないが。

先日仕入れた一級の酒、『伊森蔵』をグラスに注ぎ、七輪に新しい鰻を乗せて酒を出す。

「蒲焼きはちよいとお待ちくださいな」

「ああ、ゆつくり待つよ。さて……王、まずは乾杯といきましょうか」

「うむ、良かるう。新たな臣下と盃を交わすというのも、悪くはない」

チン、とグラス同士を合わせて、それぞれ一口飲む。『伊森蔵』はそれなりに強い酒なのだが、男は特に気にしていないように、一気に煽った。

「ふむ。王の飲み物としては些か安物だが、このような屋台だ。仕方があるまい」

「それは……王、申し訳ありません」

「なに、安酒とて時には悪くない。店主、もう一杯用意せよ」

空になったグラスをミステリアに出してくる。ミステリアは小さい

ため息と共に、「はいな」と受け取ってもう一杯注いだ。一応、ミステリアの店では一番高級な酒なのだが、これ。

蒲焼きが焼き上がり、二人に出す。あとはまあ、酒の席で盛り上がる二人を、隣で聴きながら話を振られれば入る程度だ。

どうせ今日は、この二人で店じまいだろう。ミステリアはそう考えて、グラスに『伊森蔵』を注いだ。せつかくだし、ちよつと一杯飲んでみよう。

「さて……王。これからどうなさいますか？」

「ふむ。どう、とはどういう意味だ？ ルーミア」

「いえ、この地の支配に乗り出さないのか、ということです」

「ふん、諫言には耳を傾けるのが王たる者の務めであるが、そのよ
うな戯言はどうでもよい。元より我は王、この我の総べておらぬ地
などなく、我はどこにいたところで王であることに変わりはない」

なんか目の前ですごい会話が行われていた。

ルーミア、何に毒されちゃったんだろう、と友人が心配になってくるミステリア。というか、本当に目の前にいるのがルーミアなのかどうか疑問にすら思えてくる。

「とはいえ王、ここは幻想郷。この地に王はおりません」

「何を言うか。我^{オレ}は世界を統べし王。それは極東のこのような大地でも変わらぬ」

「ここが結界によって外の世界と隔絶された場所だとしても、ですか？」

冷酒を口に含みつつ、ルーミアは男に対してそう言う。ふむ、と男は考えるように顎に手をやった。

「どういうことだ？ ルーミア」

「王は世界を統べし偉大なる王です。ですが、この地は外の世界より隔絶され、千年以上も経ています。今や里人も、偉大なる王が存在することなど覚えておりますまい。この地は結界により隔絶された瞬間に、王からの統制を拒絶したようなものです」

「……成程な。つまりこの幻想郷という地には、我が威光は届かぬということか」

「は。ですので是非、王にはこの地を支配していただきたい所存です」

ミステリアには全く理解できない会話を続ける二人。いや何考えてんの幻想郷の支配とか。というかルーミア、そんな野望持ってたっけ？

男は小さく嘆息して、そしてグラスに入っている酒を一気に煽った。

「良かろう。その諫言、受け入れようぞ」

「ありがたき幸せにございます、王」

「この世の全ては我が物と考えておったが、我が威光の届かぬ地が存在するというならば、それも一興というものよ」

くくく、と男は笑う。まるで、この世全ての悪を内包しているかのような、底知れない闇を抱えて。

「ならば、良かろう。征服王よ、時にはこの我^{オレ}も征服と戯れようではないか」

05（後書き）

カリスマA+の扱いについて。

呪いのようなカリスマということですが、誰しもがかかるわけではなく、力の弱い存在や十把一絡げのような妖怪については有効ですが、それなりに強力な妖怪や人間に対してはそこまで効果がありません。

傷ついて力の弱ったルーミアはギルガメツシュに心酔しておりましたが、EXになった現在は心酔というより忠誠という感じです。一度忠誠を誓ったから、誓い続ける、みたいなイメージで。

ちなみにみすちーは力が弱っているわけでもないのに、ギルガメツシュに心酔しません。死にかけたらするかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307ba/>

幻想郷征服録

2012年1月9日22時50分発行